

ポスト危険学プロジェクト田老・大槌実見印象記

ポスト危険学プロジェクト代表  
(株)畑村創造工学研究所代表  
畑村洋太郎

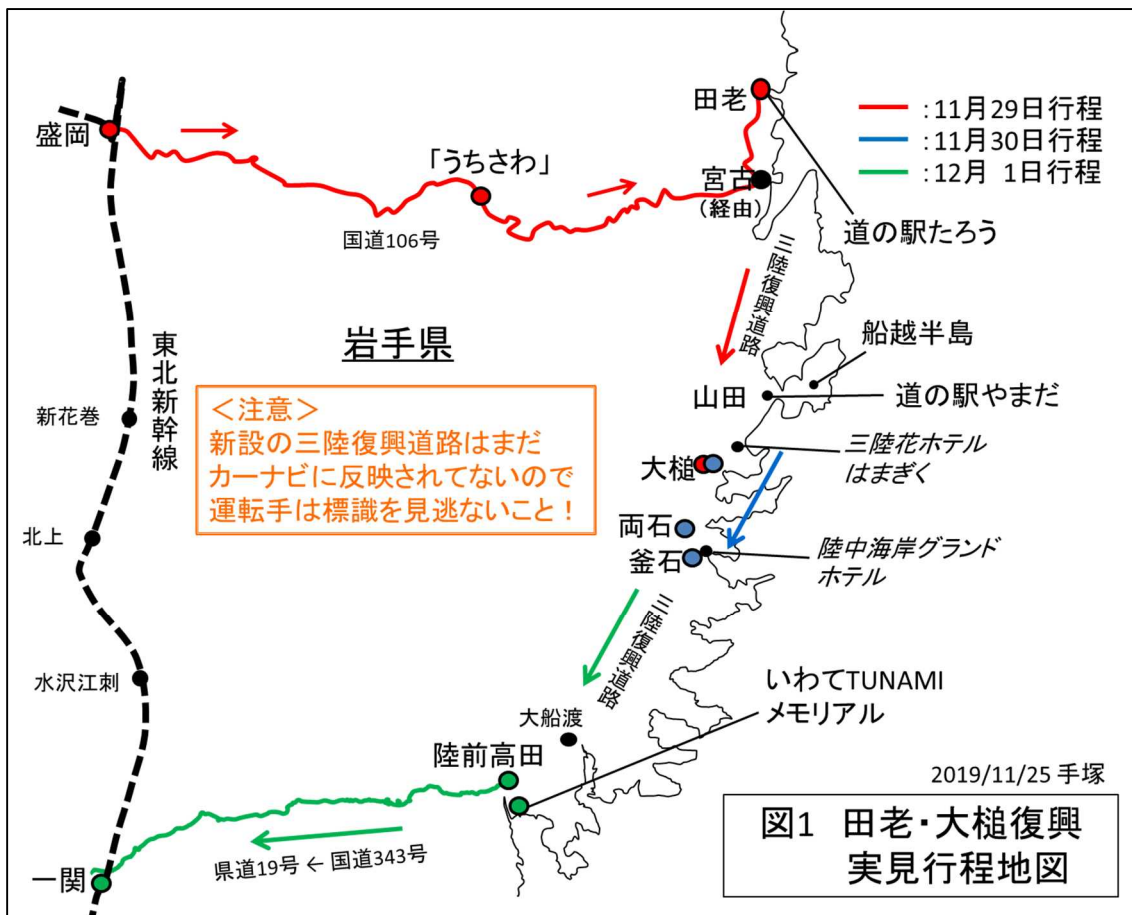
見学日 : 2019年11月29日(金)～12月1日(日) 3日とも晴れ  
見学場所 : 津波に襲われた田老・大槌・両石・釜石・大船渡(車窓から)・陸前高田  
参加者 : 畑村洋太郎 他9名  
手配 : ポスト危険学プロジェクト研究統括, 事務局  
案内と説明 : 佐々木純子様(宮古観光文化交流協会・学ぶ防災ガイド)  
S様(大槌町消防団)  
記録 : 2019年12月20日(金)  
行程 : (交通手段は新幹線とレンタカー2台)([図1](#))

2019年11月29日(金)

08:20 東京駅発 はやぶさ5号  
10:31 盛岡駅着  
11:10 トヨタレンタ盛岡駅南口店 出発  
12:20～13:15 昼食@うちさわ(宮古市川井)  
14:00 田老着 防潮堤  
14:20～16:00 学ぶ防災(ガイド付き1時間)  
16:10 田老発  
研修会用品調達@宮古(スーパー玉木屋) /  
途中休憩@道の駅やまだ(スキップ)  
17:40 三陸花ホテルはまぎく チェックイン  
18:30 夕食  
22:00～22:50 ミス・ジコチャー視聴  
24:00 就寝

2019年11月30日(土)

08:20 ホテル発  
08:30～12:30 大槌見学(大槌駅, 赤浜地区, 鈴木邸, 大槌稲荷神社)  
13:15～14:00 昼食@大槌シーサイドタウンマスト  
14:05 城山  
14:45～15:35 鶺住居トモス  
16:35 両石



- 17:35 陸中海岸グランドホテル チェックイン
- 18:30 夕食
- 20:30 酒盛り
- 22:30 就寝

2019年12月1日(日)

- 08:05 ホテル発, 防潮堤実見 10分
- 08:20~08:40 釜石大観音から釜石港湾口防波堤を遠望
- 08:40 大船渡へ向けて自動車道で南下
- 09:20 陸前高田着
- 09:30 東日本大震災津波伝承館, 奇跡の一本松, ユースホステル跡見学
- 11:45 昼食@いわて TUNAMI メモリアル内の道の駅高田松原
- 12:50 東日本大震災津波伝承館発
- 13:30 気仙沼

14:30 道の駅にて休憩  
14:50 一ノ関駅着  
15:50 一ノ関駅発 やまびこ 52号  
18:24 東京駅着

#### A. 見学の動機

危険学プロジェクトおよびその後のポスト危険学プロジェクトで得られた知見を世の中に広める活動をやってきたが、いよいよポスト危険学プロジェクトの3年間も最終になった。そこで、“3現（現地・現物・現人）”の実行として、2019年4月にJR東・事故の歴史展示館、5月に御巢鷹山、八ッ場ダムに行った。最後に残ったのが、東日本大震災の被災地である田老・大槌町の実見である。

#### B. 見聞きしたこと

11月29日に宮古観光文化交流協会・学ぶ防災ガイドの佐々木純子さんの案内で、田老地区の旧防潮堤、たろう観光ホテル（津波襲来時のビデオの視聴も）、製氷所の裏の崖を実見した。夕方からは大槌町消防団のSさんの案内で行動した。宿泊は大槌町の「三陸花ホテルはまぎく」で、料理が非常にうまかった。夜は、10時～11時まで毎週金曜夜、NHKで放映中のドラマ10「ミス・ジコチョー」の第7話を全員で視聴した。

<11月29日撮影写真, [図2](#)～[図12](#)> 田老～大槌町



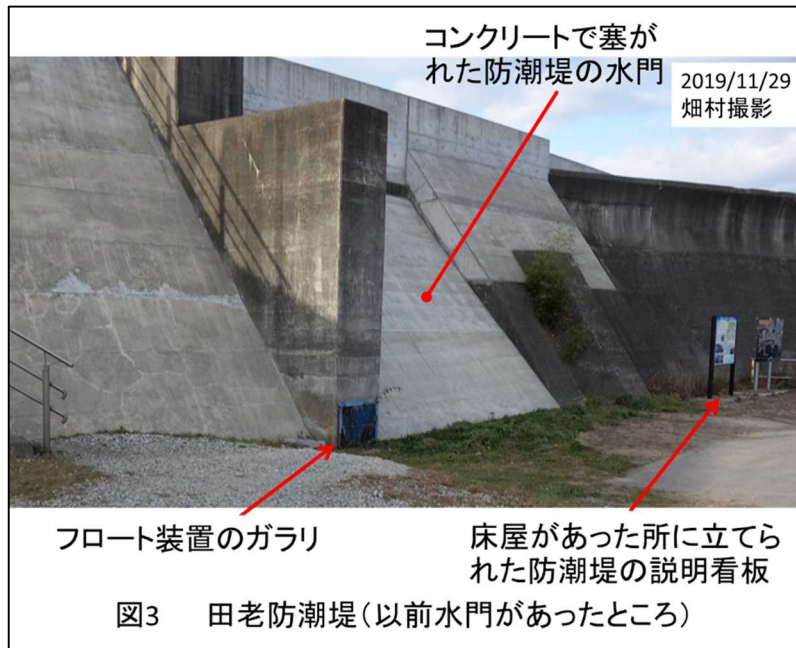






図10 田老防潮堤の閉じられた通り抜け門を居住区側から見る



図11 たろう観光ホテル6階で津波来襲時のビデオを視聴した後、窓外を見る  
実見団のメンバー



図12 震災遺構の前にて佐々木純子さん(宮古観光文化交流協会・学ぶ防災ガイド)と畑村

11月30日(土)はまず浪板海岸駅に行き、その後大槌町に移って赤浜を見た。その後、新防潮堤の工事を見、Sさんの新宅に伺って、中を見せてもらった。さらに、大槌稲荷神社に行ったり、Kさんの新築した美容室「ノア」を見せてもらったりした。その後、新築された避難所と消防の屯所などを見た。昼は街中の「大槌シーサイドタウンマスト」というスーパーの中にあるフードコートで昼食を食べ、土産を買った。その後、城山に行って街を眺め、その後で鶴住居に行った。鶴住居では震災伝承と防災学習のための施設「トモス」に行った。その後、津波の浸水高を表すモニュメントや震災発生時、多くの方が避難して犠牲となった鶴住居地区防災センターの跡地であることを記す碑を見た。その後、両石の高さ10m以上の防潮堤の工事を見た。2日目は釜石の「陸中海岸グランドホテル」に泊まった。

夜、皆でお酒を飲んでいるときに、危険学プロジェクトが終わった後も、こういう実見を時々やりたいという話になった。結局、言い出しっぺが自分で世話をして、“この指とまれ”という方式で時々やろうということになった。

<11月30日撮影写真, 図13~図25>大槌~鵜住居~両石



2019/11/30  
畑村撮影

図13 防潮堤を越えるための坂道(矢印, 水門はない)



2019/11/30  
畑村撮影

図14 津波襲来時にはガレキに埋まっていた  
大槌稲荷神社の前の擁壁

2020/03/31 修正

2020/02/05 修正

2019/12/20 記録



2019/11/30  
畑村撮影

図15 復興した街並。  
手前に個人住宅, 奥に町営住宅(矢印)



2019/11/30  
同行者撮影

図16 大槌稲荷神社境内



2019/11/30  
畑村撮影

図17 新装成った消防団の屯所





図18 城山からの遠望



図19 大槌の城山からの遠望  
津波の後、お寺は再建されたが、  
周辺の土地には空地が目立つ。

再建されたお寺



図20 被災しなかった両石駅  
写真右手の住居群は駅の10m位下の高さまで  
土盛りして高所移転したもの。



図21 両石駅より10m位下に高所移転した住宅群



図22 両石駅から見た両石湾



津波記念碑は海岸から約700m、標高約20mの場所に建立されているが、東日本大震災の津波により、この位置まで大量のガレキが押し寄せた。

図23 両石の国道脇下に作られた津波記念碑



12月1日はホテルの近くの防潮堤を見た後、釜石の大観音から釜石港湾口防波堤を遠望し、大船渡を通過して、陸前高田に行った。この日の主な実見場所はこの陸前高田である。「奇跡の一本松」や津波で破壊されたユースホステルの跡を見た後、津波伝承館に行き、津波襲来時の消防団の足取りの展示を見た。写真を撮ろうとしたが、撮影禁止と言われたので、写真は撮れなかった。その後、車で西の方向におよそ70～80km走って一関に行き、新幹線に乗って帰京した。

<12月1日撮影写真, 図26～図33>釜石～陸前高田

2019/12/1  
同行者撮影

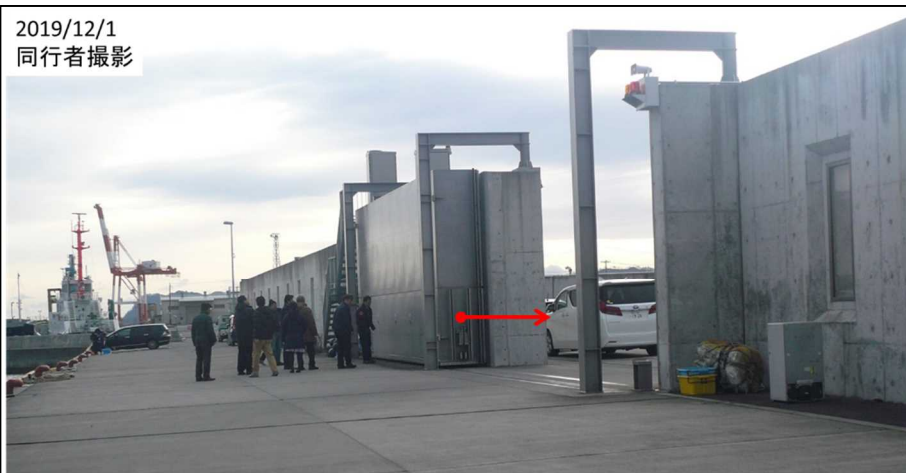


図26 釜石湾の移動防潮扉(遠隔操作される)

2019/12/1  
畑村撮影



図27 釜石観音から遠望した左右の釜石湾口防波堤

2019/12/1畑村撮影

屋上のタンク

すり鉢状の凹み



図28 陸前高田で見た津波来襲のビル  
ビルの持主は屋上のタンクに上って助かった。  
持主は被災ビルを震災遺構として保存。  
土盛を避けたすり鉢状の凹みが見える。



図29 陸前高田の津波伝承館と海への連絡通路



図30 陸前高田の防潮堤外側には松が植えられていた。



図31 陸前高田の“奇跡の一本松”  
生木ではなく乃村工芸が保存処理したもの



### C. 考えたこと・思ったこと

#### (1) 来襲して困るのは津波だけではない

田老の「たろう潮里ステーション」で佐々木さんが出迎えてくれて、話をしてくれた(図34)が、津波の被害から何とか復興ができてきたのではないかとこのころに、台風19号が襲来してまたひどい目にあつたということだった。水の災害といえば海の方から水が来る津波だけを考えていたが、台風で山の方から水が来て、排水路の掃除がきちりできていなかったため、目詰まりして、潮里ステーションの辺りは水没してしまい、また仕事ができなくなったということであった。なお、三陸を襲った津波としては、明治の大津波(1896年)、昭和の大津波(1933年)、それから今回の平成の大津波(2011年)がよく知られている(図35)が、それぞれの津波の高さは15m、10m、16mであった。田老地区の死者の数は、明治の大津波では1859人、昭和の大津波では911人、平成の津波では181人であった。死者の

数は昭和大津波では明治大津波のちょうど半分、さらに平成の大津波では、明治の1割、昭和の2割にまで減っている。このように死者の数が減少したのは、第一に津波の経験が伝承されているからだと考えられる。第二に、知識があるだけでなく、防災のための防潮堤を作るというような行為がきちんと行われ、その効果が大きかったからだという気がする。伝承と防災設備、訓練、防護体制の効果だと思うが、避難が必要な人の約1割が亡くなっていることになる。とすると、逃げることができない人や何らかの理由で逃げなくてもよいと判断する人がこのくらいはいつも残ってしまうと考えなければいけないのではないだろうか。逃げろというのを言って回っているのに、逃げられないか、水が堤防の上まで来ているのにそのことを知らないで大丈夫だと考えて亡くなってしまった人の数のことを考えなければいけないと思う。



## (2) 3年以内に帰還しないと社会は消える

大きな工事が現在も行われており、復興が相当進んでいると報道されている。遠くにいれば、そうかと思うが、現地に行ってみると人気（ひとけ）がない。外見の復興ができたとしても、人が戻ってこない。なぜ人が戻ってこないのだろうか。津波によって地域が破壊されると、生活のために他の場所に移り住むしかない。移住して3年も経てば、移住先での生活が根付いてしまう。そうなる、被災して移転した人の立場で考えれば、元に戻るというより、改めてその地での生活を捨てて転居しなければならないということになるのではないか。帰りたいという気持ちはあるだろうが、実際にもう一度生活を一から立て直すことを考えたら、現役世代の人達には荷が重すぎるのではないだろうか。

これは福島原発事故で被災した飯館村を見ていると非常によくわかるが、復興事業をや

って、帰還の準備が出来たから戻ってきてもいいよと言っても、帰ってくるのは高齢者ばかりである。高齢者が帰ってきて、世話をする人が戻ってこないから、本当の生活ができないというジレンマが起こる。

災害が起こって移転を余儀なくされても、ごく短期間、たとえば3年以内に帰還しなければその地域の社会が消えると考えられる必要がある。また、帰還する場合のメリットとデメリットとのバランスをとって考えなければならないのではないだろうか。福島原発事故から8年経ち、帰還できるようになったとしても、帰ってくる人はほとんどいないのではないかと考える。チェルノブイリ原発事故のときに得られた知見、避難した人の方が避難しなかった人よりも寿命が7年も短くなったという事実をもっと重く考えなければいけないのではないか。それが田老でも起こっているのではないかということを考えた。

#### D. 人が住まない区域を作るのが完全な防災か？

高さ15mの防潮堤を作れば、多くの津波から町を守ることはできるだろう。だが、作った防潮堤がどんな津波にも絶対耐えられるという保証はない。崖に表示されている過去の津波の高さを比較すると、平成の津波は明治の大津波の上をいっている。地震があったら（揺れを感じなくても津波が来ることもあるが）、津波が来ると考えて逃げるしかないのではないかという気がする。

では、人が住まない区域を作るのが完全な防災かという疑問がわいた。津波で被災する地域には人が住まないのが一番良い防災になると思う。その通りだ。津波被害が想定されている地域の住民は、津波の警報が出るたびに避難を繰り返しながら、生きていかねばならない。しかし、実際にはそれができず、亡くなる人が大勢いるという現実を見ると、完全に人が住まない区域を作るのが正しいとは思わない。しかし、実際には、田老でもそうだが、そういう区域にも家を建ててしまっただけで、津波警報が出たらちゃんと逃げるつもりだからここに住みたいという人が出てくる。こういうことを考えると、完全に人が住まない区域を作ってしまうのかという疑問が起こる。しかし、津波の危険がある地域に住み、避難を繰り返すということも年齢を重ねれば次第にできなくなる。そういうことまで考えると、このような計画を作り実行するのが正しいとは思いますが、本当にそういうことが継続して実行できるのかという問題が残っているという気がする。

#### E. 区画整理の適用の矛盾をどう見るか

Sさんの家は区画整理で土地が削られ、新たに家を建てる場所も指定されたということである。区画整理では、区画整理をするときに面積を減らすのが、その分は利便性が増すので金銭的な補償はしないのだということを聞いたことがある。そういう理屈は立つだろうが、一つの復興事業において、そういう区画整理のやり方が適応されるところと、そうでない事業



が行われるところで、扱いが違うのだということを知った。実際の行政ではそういうことが必要になるということはわかるが、現存の法律体系下でできることだけにしがみつかないで、大きく「罹災特区」という考えで、地域全体を同一の復興事業のやり方でできるようにしないと、多くの問題が起こってしまうような気がする。

#### F. 行政の縦割りが建物の作りにも現れる

大槌町の津波の避難所に行ってみた。避難所はそのすぐ隣にある避難ホールとは建物の構造としてはつながっているが、内部は完全に分離されていた(図36, 37)。津波の避難所は、災害発生時の一時的な避難場所として作られたものではない。一方、避難ホールの方はそこで生活ができるように考えられている。元々の趣旨が違うものをつないでおかないと不便だということで、一つの構造のようになっていた..



行政からすれば、そうやるのが当然ということになるのだろうが、一体運用しないことには非常にもったいないし、危険である

しかし、ある津波の避難所の建物が二つに分かれていて、一方の建物は屋上に登ることができたが、もう一方は屋上に登る階段がなく、天井付近まで水が来て、ほとんどの人が溺れ死んだという話を聞いた。もし隣の建物に移る通路や屋上までの階段が作ってあれば、そんなに多くの人死なないで済んだということになる。

それぞれの人がどのように亡くなったかという最後のとどのつまりまでのデータをきちんと収集して考えるべきで、行政の区分けをそのまま当てはめるようなことをしてはいけないのではないかという気がする。

#### G. ひよっこりひょうたん島が一番伝わる

津波を後世の人達に伝えようと皆が考え、様々な伝承館が作られ、津波の災害遺構なども保存されている。しかし、これで本当に伝わるのだろうか？

大槌湾の中に蓬莱島というのがある(図38)。今から約50年前のNHKテレビの人形劇「ひよっこりひょうたん島」のモデルになったという島である。今回の津波でもその蓬莱島のところだけは、渦が巻いて、その渦の中心になったのではないかと推察するが、結局蓬莱島だけは崩れないでそのまま残った。島に赤浜から歩いて行けるように通路が出来ていた。この人形劇は非常に面白かった。少しずるいけれど知恵者の人間味の溢れる「トラヒゲ」という海賊がいて、それが色々なことをやるという話だった。面白いものは皆の記憶の中に残っている。伝承館を作ったり、何かそういう教育的な物でやるよりも、小説であったり、ドラマであったり、漫画であったり、人形劇であったり、人の心に直接伝わるような手段で次に伝えていくのが一番いいのではないか。「ひよっこりひょうたん島」が示唆を与えていると思った。



図38 大槌湾に浮かぶ蓬莱島  
(ひよっこりひょうたん島)

#### H. Sさん・Kさんの生き方が真の復興だ

SさんもKさんも大槌町に住み、自分の仕事をやり、生きてきた。津波で家を流されて仮設住宅に入り、8年経ってようやく自分の家を持つことができた。

二人とも自分が生まれ育って生きていた町に戻ってきて、そこで再び生活を始めようとしている。Sさんのお宅に伺ってもKさんの美容室に行っても、そのことを非常に強く感じた。元の世界に戻り、元の仕事でこの社会の中で活動していく、そういう人がいることが真の復興だというふうに思った。

Kさんの店は大槌町を南北に貫通する国道沿いにある(図39)。ノアの箱舟から名前を取って、「ノア」としたのだそうだ。行って見て色々なことを感じた。

消防団員のSさんは大槌川にかかる橋のたもとところで消防車でみんなに“逃げろ”と言いつけ、津波が来て間一髪助かったという話を聞いているので、橋の向こう側とこちら側とでちょうど二人が七夕のようなふうになっているのだなと思った。



図39 新装成ったKさんの美容室「ノア」  
主要道路に面した一人働きの店

#### I. 私にはそんな度胸はない

たろう観光ホテルの社長の松本さんは地震の後、従業員と家族を裏山に逃がし、自分はホテルに戻って6階にビデオをセットして津波の襲来を待ったそうである。いくら自信作の建物とはいえ、津波に吞まれるかもしれない建物の一番上に上がって記録を撮ろうとしたのだから恐れ入る。私には恐ろしくてそんな立派なことは到底できない。松本さんはそれを実行したのである。そしてそれがあからこそ、今、皆がたろう観光ホテルに来て、ビデオを見て衝撃を得、非常に強い印象を受けて帰っていく。最高の観光資源になっている。

しかし、私にはそんな度胸はない。

#### J. 危険学プロジェクトの活動は“勝手連”が引き継ぐ

実見行の中日の11月30日の夜、危険学プロジェクト・ポスト危険学プロジェクトが2020年の3月で完全に終了してしまうと、このような活動は二度ないだろうという話になった。しかし、こういう学びの場が全くなってしまうのはもったいない。それならどうするのがいいかについて皆で意見を出し合った。そして、自分がやりたいことがあれば、自ら幹事となり、「この指止まれ」と仲間を募ったらどうかという話になった。そのようなやり方で

活動が続く限り、勉強をし続ければよいのではないかとこのころで話がまとまった。

3 現を執行して学ぶ活動として、田老・大槌町を定点観測して三陸の津波を学ぶこと、八ッ場ダム、JAL 機の墜落現場である御巢鷹山の慰霊登山、鉄道事故を学ぶこと、などについて続けていきたいということになった。

こういうやり方を続けることがたぶん一番素晴らしいことになると思う。こういう自発的な活動をやり続けてもらうことは、危険学プロジェクトを終了する私にとっては望外の喜びである。こういう活動が続くことを期待している。

#### 謝辞

ポスト危険学プロジェクト研究統括および事務局，S さん，本当にお世話になりました。お陰様でとても良い勉強ができました。田老・大槌町の定点観測を続けてこられたのも，ポスト危険学プロジェクト研究統括および事務局，S さんのお蔭だととてもありがたく思っている。危険学プロジェクトを発案・実施した代表としてお礼を言いたいと思う。

ありがとうございました。

以上